

京都市右京区 小野 恵美子 (91 歳)

私の学校の思い出は、まず小学3年生で日中戦争が始まり、近所のおじさんたちが次々と軍服姿で中国へ中国へと送られ、1、2年すると白い箱の中にお骨になって戻って来られ、名誉の戦死という名前に変わってしまわれた。そのような日々が私たち小学生の生活の日常になってしまっていました。

そのような日常の続きが、私の女学校1年生の、緊張と上級生に埋まっているセーラー服姿の中に、定期券を持ち、嵐電と市電を乗り継ぎ通学していた緊張のまだ解けていなかった12月8日の朝、登校前の靴を揃えていた時、ラジオから軍艦マーチが勇ましく鳴り出し、「今日未明、真珠湾沖において…」とけたたましいアナウンサーの声と重なり、アメリカと戦闘状態に…と聞こえてきた。

母は「これは大変なことになるね…」とだけ言い、私に「行ってらっしゃい」と声をかけてくれたのを覚えている。

こうした日常は、戦争は中国とアメリカを相手の「戦時中」といった言葉で埋められて、それがもう日常。戦争は近所のおじさんたちが軍服を着て近所の人たちに見送られて、最初は中国本土に…だから私たちの日常生活にはそれほど影響はなかったものの、日に日に生活は厳しく、近距離の電車通学は徒歩に…と。また、スカートでなくモンペ（農家の人たちの労働着）でなくては…と注意されるとか、学校農園とかで岩倉に広い土地を学年交替で鍬を担いで耕しに行くなど、多分先生も初めてのことで、ご苦労なさったと思います。「学生は学問を」の時代は学生も銃後の守りと増産に励む、その上戦争の勝利と闘っている兵隊の無事を祈願の神社参拝を、当時の女学生たちは定期的に行っていました。

このような時期も戦況の傾きにより、女専の先輩たちは舞鶴の海軍の基地に、私たち在校生も兵庫県の伊丹へ勤労働員へ、しかも寮生活…と、敗戦前の夏に京都市内の女学校生徒はまじめに働きました。粗末な食事でも、空腹でも我慢して…。私は母に聞いてほしくて日記を書き続け、今も書棚のどこかに…。

毎日朝となく夜となく鳴るサイレンにも「もう死んでもええし、寝させて…」との同室の人たちの切ない思いを抱えて…。

以上にしておきます。

何かの機会がありました折には、15、6歳のその時の少女の叫びを…こうした哀しい15、6歳を体験させたくない…との思いで生きてきました。ただ今91歳の元少女です。